第３分科会　書くことⅡ

ことばを蓄え、ことばを生かす国語教室の創造

～創作・鑑賞・批評を通して、想像豊かに書く力の育成～

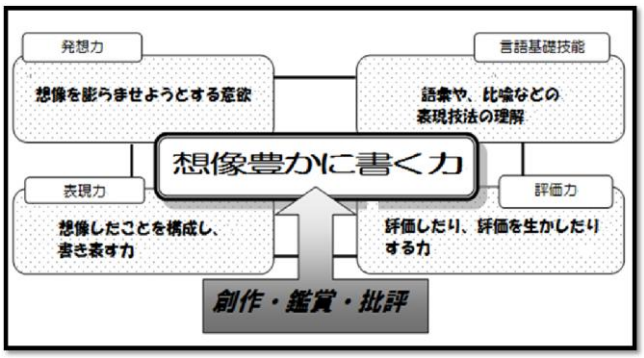
１　研究のねらい

平成２４年度から完全実施されている学習指導要領において、国語科の目標として「国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。」と掲げられており、思考力のみならず想像力を養うことがクローズアップされている。それは、現代の子どもたちが１０年後、２０年後と、どのように変化しているか分からない未来社会を生きていくには、基盤となる知識を活用しながら、次に起こる事態を想定して対応していく力が必要となるからであろう。また、人間関係が希薄化している今、お互いの思いを想像することで、より深く理解しあっていかなければならないからであろう。以上のことから、国語科の授業を通して、将来生きて働く力の礎となる想像力の育成、伸長を図ることは、大きな意義をもつと考えられる。

ところで、指導要領では「創作」が国語科の内容に加えられ、俳句・短歌・詩・随筆などの創作が教科書に盛り込まれた。「創作」することには、想像力を育てたり、語彙を広げたり、一つの言葉の大切さや言葉の豊かさに気付き、言葉の用い方に自覚的になったりなど、様々な効果がある。生徒のものの見方や感性を豊かなものにすることもできるだろう。また、表現の仕方、内包されている意思などについて、多様な角度から光を当て、そのよさを見極めたり、味わったりする「鑑賞」を通して、対象や素材の表現の仕方、受けた印象や感動を書き表すために言葉や表現を十分吟味したり、言葉からイメージを広げたりする力も育まれるだろう。さらに、対象とする物事や作品などのよさや特性、価値などについて、論じたり、評価したりする「批評」を通して、視野や想像を広げて客観的に物事を考える力も育まれるだろう。

そこで本研究では、創作・鑑賞・批評の言語活動を通して「想像豊かに書く力」を育成したいと考えた。

２　研究の内容



本研究では、「想像豊かに書く力」を、「言語を手掛かりとして思い描いたイメージを構成し、書き表す力」ととらえ、「発想力」「表現力」「言語基礎技能」「評価力」の四つの力を総称して言うこととする。

思考は言語を媒介として成立し、物事の見方、考え方、感じ方は、言語による表現という行為を通して、確かで豊かなものになる。したがって、その言語を手掛かりとしながら想像を働かせて、今までに意識しなかったこと、新しく発見したこと、イメージしたことを表出する力を身に付けさせていきたいと考えたのである。

「発想力」とは、想像してみよう、想像を膨らませようとする意欲のことである。まずは、この「発想力」がなくては想像することすらできないだろうと考えた。

「言語基礎技能」とは、想像したことを生き生きと効果的に書き表すための技能のことである。語彙の理解や、比喩等の表現技法の理解がこれにあたる。

「表現力」とは、想像したことを構成し、書き表す力のことである。せっかく想像を膨らませても、書くための見通しや方法がわかっていなければ、書こうとする意欲も失われてしまうだろうと考えた。

「評価力」とは、お互いに評価し合い、評価されたことを生かす力のことである。つまり、交流によって多

様な発想や、文章の構成、描写の仕方の工夫、改善点などに気付いて自分の考えを広げる力のことを指す。他者からの評価によって気付かされたり、改めて認識したりしたことが、自分の表現をよりよいものに高め、自分の見方や考え方を深めることに役立つだろうと考えた。

これらを踏まえ、以下のような手立てをもとに授業を構築することとした。

（1） 発想を広げるための思考ツールの活用

想像豊かに書くためには、発想を広げ、広げたことを整理していく必要がある。自分の頭の中だけでは整理できないことも、思考ツールで思考の過程を可視化することでまとめやすくなる。そこで、目的に合った思考ツールを用いることで、想像することの楽しさや喜びを味わえるようにした。

（2） 「読むこと」での学びを生かした学習活動の設定

語彙や表現技法などの言語基礎技能は、一朝一夕に身に付くものではない。理解し、くり返し使ってこそ身に付くものである。そこで、文学的教材でよく使われる表現技法をフラッシュカードにして、いつでも提示できるようにした。また、『走れメロス』や『星の花が降るころに』等の文学的教材に用いられている描写の工夫に着目させ、自分の表現に生かす学習活動を「書くこと」の学習の中に位置付けた。

（3） ワークシートの工夫

自分の考えを整理し、それをどのように書けばよいか（学習用語、構成の仕方、各段落の内容、書き出し等）がわかる「学習の手引き」を兼ねたワークシートを工夫した。

（4） 学びの場をひらく交流活動の充実

「書くこと」の学習は個に閉じやすく、「書く力」も個人差が大きい。書くことが苦手な生徒ほど、書くことに精一杯で、それをどう書き直せばよりよくなるのかなど、自分の文章を客観的に見直すことが容易ではない。そこで、指導過程に交流の場を設定し、交流の観点の明確化、交流の方法を工夫した。

３ 研究の成果と今後の課題

（1） 研究の成果

① 様々な思考ツールの活用によって、想像したり、発想を広げたりしやすくなり、「何も思い浮かばない」という生徒はいなくなった。

② 「読むこと」での学びを生かすことで、効果的な表現や表現技法を意識して使うようになった。

③ ワークシートの工夫によって、書くことが苦手な生徒も書く順序や内容がわかり、書きあげたことへの達成感や、書くことへの意欲をもつことができた。

④ 交流の観点を明確にしたことで、指摘や助言をもとに推敲したり、自分では思いもつかなかった発想や表現の工夫を学んだりすることができた。

（2） 今後の課題

① 思考ツールの活用は、言葉遊びになってしまう傾向もある。想像の広がりを整理していくためのワークシートのさらなる工夫が必要である。

② 書くことの学習に生かすために、普段から文学的教材を学習する際に、気に入った表現をメモする習慣を付けさせておく必要がある。

③ 書く力のある生徒がより意欲的に取り組めるように、生徒の実態に応じたワークシートを工夫する必要がある。

④ 交流の際のグループ編成の仕方など、より効果的な交流の方法について検討していく必要がある。

≪参考文献≫

○ 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説　国語編』東洋館出版社

○ 文部科学省(2010)『高等学校学習指導要領解説　国語編』教育出版